
清二の夏

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清一の夏

【著者名】

N4549E

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

小児癌に身体を蝕まれている野球少年清一は、自分のとつて最後の試合に出たいと切に願った。しかし、首を縊に振らない監督。だが、清一は……

純潔を表す白に囲まれた病院の個室。窓からは日光が降り注いでいた。

窓のそばに配置してある小心翼べッドに横たわる少年の名は清一。小学6年生。

頭髪は一本も無く、身体には太い点滴の管が巻かれていた。

彼は野球部に所属している。

だが、それはもう過去の事になろうとしていた。

一人ため息をつく。

その時、病室の扉が音を立てて開いた。

立っていたのは中年の男。

男は清一の方へと近づいた。

清一はベッドから半身を起こすと、その男に言った。

「お願いします、自分を、試合に出させて下さー」

深く頭を下げる。

だが、中年の男は首を縦に振らなかつた。

「自分がどういう状態か分かつているのか、お前は小児癌にかかりていて外に出て歩く事すら困難なんだぞ。そんなお前が試合に出たら病状が悪化するのは間違いないだろ」

「それでも俺は試合に出たいんです」

「彼はどうしても試合に出たかった。

小学1年生の時に野球チームに入り、その後ぐんぐん野球の才能が開花していく。

だが3年生の頃、体におかしなことが起るようになった。

練習の疲れが抜けない、全身がだるい、食べ物が喉を通らない。

医者に連れて行つてもらつたら、重度の小児癌と診断された。

そして病魔はどんどん彼の体を蝕んだ。

薬の副作用で身体は痩せ衰え、頭髪は一本残らず抜け落ちた。

4年生からしか試合に出してもうえという決まりがある故、彼はまだ一度も試合に出れなかつた。

最後に一度でいいから試合に出たいといつことで、チームの監督と直談判したが

「ダメといつたらだめだ」

その監督はブツブツ何かを言いながら、病室を早足で出て行つた。扉を閉める音が、小さな病室に悲しく響いた。

中年の男が一人、冷房の効いた病院のエレベーターに乗つていた。エレベーターが一階から一階に通過する間、その男は目頭を抑えながら搾り出すよつな声で言つた。

「すまん、本当はお前を試合に出したかったんだ、許してくれ」「チン」という音と共に、エレベーターが一階に着いた。

昨日降つていた雨のせいでグラウンドの土は多少湿つていたが、今は晴天。絶好の試合日和である。

この日は二校の小学校の間で野球部の試合が行われるのだ。試合前、ベンチに座つている一人の少年が呟く。

「清一の奴……応援くらい、来て欲しかつたな」

ユニフォームの背中に印刷された春田丘マリーンズの文字が、微かに震えていた。

監督らしい中年の男が言つた。

「宇根、試合始まるぞ」

「はい」

試合は春田丘マリーンズがリードしている状態で進んでいた。だがハ回表、相手チームのエースが打席に立つた。

『カーン』

球がバットに勢いよく飛ばされる音が響いた。

球は観客席に落ち、今打った相手チームエースと壘に立っていた一人がホームベースに走った。

形成は一気に逆転。一点の負い点を覆す事は出来ず、九回裏に突入した。

打席には宇根がいた。先ほどヒットを出した者が一壘に立っている。ここでホームランを打つことができたら逆転勝ちできる。

相手ピッチャーが投げた。宇根はバットを振るが、空を切った。二球目、一直線に投げられたストレートが、宇根の腹に直撃した。思わずバッドを落として身を縮めた。

大丈夫か、とチームメイトが駆け寄る。

刹那

「俺が代わりに打ちます」

皆が振り向いた

そこには点滴台を持つた清一がいた。

清一はようよると覚束ない足取りでバッターボックスに向かった。監督が清一に対してもう一つ言つ。

「何をしてるんだお前は！」

「試合あるのに、ベッドでゆつくり出来るわけないじゃないですか？」

「今すぐ病院に戻れ」

「待つて、俺の代わりに清一に打たせて下せ！」

宇根が言つた。

「代打には他の者を用意するから、お前は黙つてろ」

その時だった。

「俺からもお願ひします」

「俺からも」

春日丘マリーンズのチームメイト全員が代打に清一を用いるよう監督に頼み込んだ。

これにはさすがの監督も折れた。

「わかつた、清一、無理をするんじゃないぞ」

「はい！」

清一は点滴台を横に立て、バットを握った。

ピッチャ―が投げた。ストレート。速い球ではないが、キャッチャ―のグローブに入った。

二球目、またも空振り。次第に清一は焦つた。
自分のために監督に頭を下げて頼み込んだチームメイトに報いる為、
打たねばならない。

そして、これが自分にとって最後の試合となるかもしれないのだ。

清一は、自分の寿命が残り少ないので知っていた。

先日、清一は自分の母親と医者が話しているのを偶然見かけた。
それに聞き耳をたてると、医者が言つた。

「お子様は、もう長くないかもしません。もつて二ヶ月が限界か
と」

そこで、自分の母親がさめざめと泣いた。

清一も同じ気持ちだつた。だが、そんなこと氣付かないフリをして
過ごした。

自分に後二ヶ月と思い出させたくなかつたから。

清一は全てをこの試合にかけていた。ホームランを打ち、チームを
勝利に導いてやると。

「来い！」

相手ピッチャ―は頷き、球を投げた。

先の一球とは速さが上がつていた。相手ピッチャ―の心遣いなのだ
らうか。

だが、どちらでもよい。全てを球に集中させた。

余力を全て出し、バットを思い切り振つた。

ボールはバットに当たつた。だが、ぽとぽと落ちた。
しかし、相手はその球を拾いにいこうとしなかつた。
代わりに、「ガンバレ！！」の声援。

味方からも同じ声援。

皆の声援を受け、清一は走った。

いや、正しく言つなら足を引きずりながら歩いた、のほうがいいかもしねない。

点滴台を杖のように使い、一塁を踏む。

途中転びそうになりながら一塁へ、三塁へ。一塁にいた者も、走るのを忘れたかのように清一に声援を送っていた。

あとはホームベースを踏むのみ。しかし、そこで清一は倒れた。朦朧とする意識の中、あるのは使命感だけ。

最後の力を振り絞って、清一は立ち上がった。

ホームベースまであと四メートル、三メートル、二メートル、一メートル。

清一は力尽き、倒れこんだ。

だが

右手が、ホームベースにつっていた。

味方から、相手チームから、歓喜の声があがつた。

その声に紛れて審判。

「すいません、ファールです」

(後書き)

ほんつどじめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4549e/>

清二の夏

2010年11月19日16時13分発行